



2017 年 (平成 29 年)
5 月号 (No. 864)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

全長100kmの「ぐんま県境稜線トレイル(仮称)」の整備が進む	1
「歴史と信仰の山を訪ねて」に思う	4
日本山岳会再生委員会を閉じるにあたって	5
「かながわ山岳誌」への取り組みスタート	6
満開の桜の下、第5回小島烏水祭開催	7
防災ヘリによる山岳遭難救助、埼玉県が全国初の有料化に	8
故秩父宮雍仁親王がお造りになった空沼小屋の修復成る	9
東西南北	10
活動報告	11
山行委員会	
新入会員	12
新入準会員	13
図書受入報告	13
図書紹介	14
会務報告	16
会員異動	17
ルーム日誌	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

全長100kmの「ぐんま県境稜線トレイル(仮称)」の整備が進む

近年、ロングトレイルが人気を呼び、全国各地で整備が進んでいるが、群馬県の県境稜線を結ぶ全長約100kmの本格的な山岳トレイル「ぐんま県境稜線トレイル(仮称)」の整備が群馬県の手で行中である。日本山岳会群馬支部も実務部隊として参画しており、平成30年度の全通が待たれるところ。

群馬支部 武尾 誠

群馬県が新潟、長野との県境山脈の稜線を1本の線で結ぶ、全長約100kmの「ぐんま県境稜線トレイル(仮称)」の整備を進めている。一部、登山道のない区間(約9km)は昨年秋に山岳関係者によって調査され、平成30年度には全通する見通し。ピークの「点」から稜線の「線」へ、そして、山麓の著名温泉地などを巻き込んだ「面的」な広がりへ。新しい山岳観光や雇用

群馬県職員が発案

稜線トレイルの構想は、群馬県職員の平成27年度政策プレゼンテーションから生まれた。発案者は現在、財政課に席を置く片貝和晶

さん。谷川岳や尾瀬を管内に持つ利根沼田行政県税事務所に勤務していた時期という。山岳や自然に囲まれた環境が産み出したアイデアと言える。

「山ガール」の登場や登山の形態の多様化、海外登山者増などによって何度目かの「山(自然)のブーム」が巻き起こっている。「山の日」も制定された。山の資源に恵まれた群馬県が、「稜線トレイル」を新たな山岳観光と雇用の創出に活用しようという目をつけた訳だ。

その後、スポーツ振興課に引き継がれて具体化。28年6月に県とみなかみ町、中之条町、草津町、嬬恋村の沿線4町村長、山岳・観光関係者で「稜線トレイル」検討委員会(会長・大沢正明知事)が、ほぼ同時に、日本山岳会群馬支部、県

山岳連盟、県勤労者山岳連盟の山岳3団体による県山岳団体連絡協議会(会長・八木原罔明日本山岳協会会長)が発足した。この連絡協が実務部隊の役目を果たす。

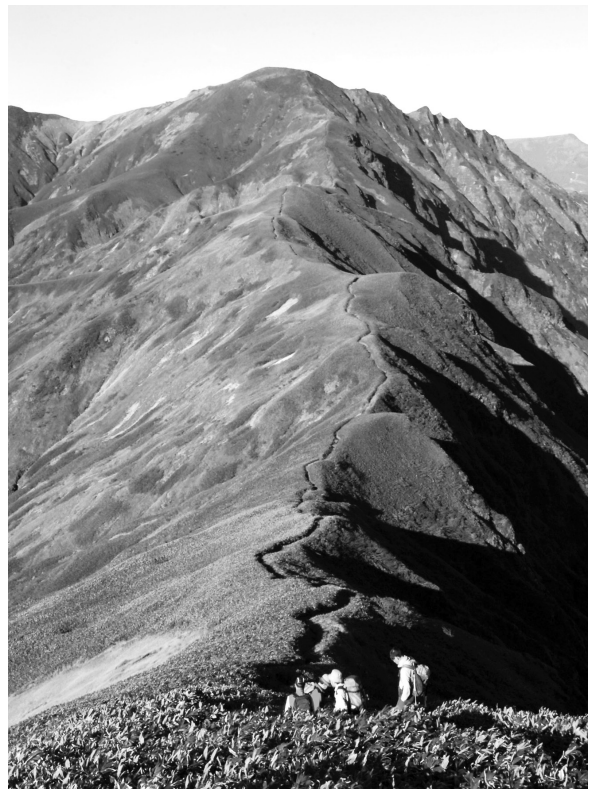
28年度事業として今年3月18日、女優の工藤夕貴さんを招いた「ぐんま県境稜線トレイル推進シンポジウム」を開催。100kmの稜線中で登山道が空白の白砂山―三坂峠(9km)の区間は、群馬支部、県山岳連盟、県勤労者山岳連盟の選抜チームが調査。隊長は支部会員で県岳連理事長の佐藤光由さんが務めた。

事業が本格化する29年度は、破格の約1億円を予算化。未開通区間の測量、避難小屋の設置検討、既設登山道の再整備、名称・ロゴの公募、それにPR活動を行なう。

沿線町村も期待

全線開通へのプロモーションを兼ねた「推進シンポ」は、前橋・群馬県庁の県民ホールで開かれた。ヤマケイ登山総合研究所所長の久保田賢次さんをコーディネーターに、女優の工藤夕貴さん、沿線4町村の山岳・自然観光の関係者が、それに佐藤光由さんを加えた6人がパネリストを務めた。県民ホールは450席が満席。同トレイルへの関心の高さをうかがわせた。

この中で、佐藤さんは「全国で一番長く、20000m級の遮るもの



上越県境・万太郎山へと続く稜線

のない稜線を歩く」と、スケールと眺望の良さを指摘。また、日本3大岩場の谷川岳、牧歌的な野反湖周辺、火山性地形の万座・草津白根地区を例に挙げて、地形・山容の変化も彩りを添えている点も特徴とした。

全線開通による相乗効果を期待する声も相次いだ。「野反湖畔は絶好の中継点になる」「稜線下の温泉地の横のつながりができるといい」「みなかみ町は総合アウトドアで売りに出している。新たに魅力が加わる」など。3500万人と言われる、潜在的愛好者人口が控

えているだけに、関係者の期待は膨らむばかりだ。

全通後の維持・管理、道標の統一、マネージメントなどの課題についても言及された。

パネリストの意見を含めた私見となるが、道標は同じデザインで統一することが不可欠。そして、この「稜線トレイル」のネーミングも。名は体を表わす。わくわく感のある、特徴を端的に表わす、アピール度の高い名前が欲しい。道標も著名なデザイナーに作成を依頼したらどうだろう。あつてはならないことだが、持ち去られるくらい、人を惹き付ける道標にしたものだ。

安全に最大の配慮を

全通を宣言すると、入山人口の増加が予想される。経験を積んだ登山者が踏み入れていた稜線に、「ロングトレイル」の名に誘われて、安易に入り込む経験の浅いトレッカー数は確実に増える。最大限の「安全装置」を準備しなければ、地元の夢・期待は水泡に帰す。むしろ広げた風呂敷の分だけ、しつぺ返しは大きくなる。

最低限必要なのが山小屋と道標

の充実だろう。県は昨年9月の調査を受けて、「空白の9km」区間のムジナ平に避難小屋の新設を計画。この結果、100kmの区間に3ヶ所の有人、12ヶ所の避難小屋が存在することになるが……。

群馬県内の避難小屋は、他県に比べて恵まれているとは言いがたい。ドラム缶を縦に半分に切ったようなものが比較的多い。「緊急」避難小屋と言った方が適当かもしれない。居住性はお世辞にも良いとは言えず、中長期的に見て、質と量の充実が当然求められる。

将来の運営をだれが担う

最大の課題は全通後のマネージメントだ。県は当面、検討委員会が統括し、登山道の維持管理は沿線の4町村が担当する方針だ。その先には、信越トレイルのようなNPO法人化構想もあるが、県を含めた行政の関わりの深度は決まっていない。「日本最長の稜線ロングトレイル」を声高に宣言はしたが、先の運営はまだ不透明だ。

サッカーのJリーグのクラブ、特に地方の弱小クラブは行政とスポンサー、サポーターで経営が成り立っている。ホームタウンと呼



450人が参加したトレイル推進シンポジウム

ばれる行政は施設の整備や改修で支え、スポンサーは地域貢献として資金面で援助。サポーターと呼ばれる観客は入場料を払って会場に来るだけでなく、ボランティアとして試合の運営の手伝いもしている。

ロングトレイルの管理・運営も行政、スポンサー、山岳団体関係者を含む利用者の3者の協働が求められる。そして、3者の中で今一番手薄なのが、資金面で支えてくれるスポンサーの開拓と言えまいか。

様々なハードルが予想されるが、道標に寄贈企業名を入れたり、山小屋にネーミング・ライトを採用

し、「〇〇小屋」といった資金提供企業名を配した小屋を造つてもいい。スポンサーの手助けがあれば、行政だけでは実現できない山小屋の住環境改善など、ホスピタリティ向上のいろいろな策が可能となる。発案者の県も、稜線トレイルを「県道」並みの扱いにするくらいの覚悟が必要ではないか。

「山の日」の制定や今回の稜線トレイルなどが契機になって、県内の山岳3団体が連絡協議会として同じ歩みを始めた。画期的であるし、周囲の期待も大きい。稜線トレイル構想では、分担して全ルート of 調査も行なっている。

連絡協議会には「安全・安心の確保」と全通後の管理・運営に、県や地元の関係者と連携して継続的に関わっていくことが求められる。組織人員の高齢化や減少といった同じ悩みを持つが、3500万人と言われる潜在人口を足掛かりに、組織の再活性化も夢ではない。

まずは、稜線トレイルの中長期的な、夢の構想をみんなで創り上げようではないか。Jリーグの「百年構想」のような遠大な構想と、それに向かう熱意が行政やスポンサーを動かしていく。

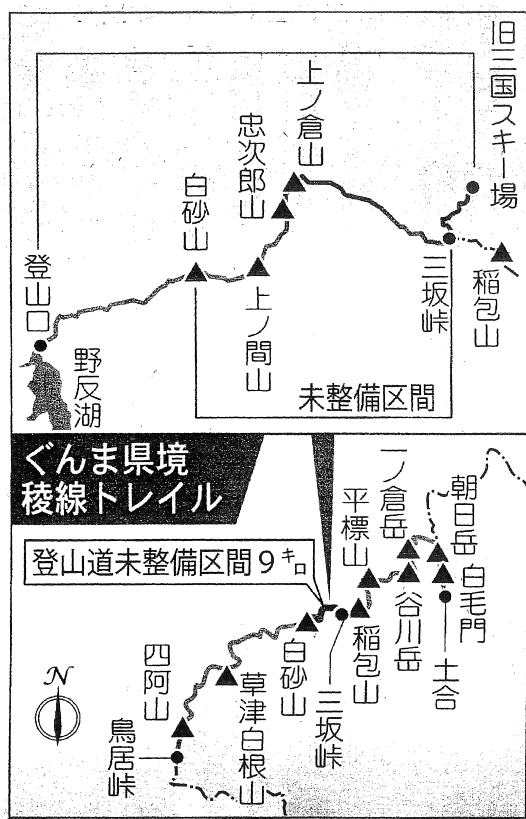
「ルート概要」

「稜線トレイル」を白毛門からたどる。谷川連峰の馬蹄形縦走のスタート地点だ。稜線は笠ヶ岳から朝日岳へと延び、新潟県との県境稜線に入る。清水峠―蓬峠を経て、馬蹄形の西半分をトマの耳まで南下する。稜線の左側には、一ノ倉沢など谷川岳東面の大岩壁が切れ落ちる。

トレイルはトマの耳から西へ。平標山へと続く長大な、天空の路が始まる。平標山から三国山へと一度南下し、三国峠を通過して稲包山へ。三坂峠―白砂山間の未整備区間を経て、長野県との県境稜

線へ。草津白根山から万座山周辺は一部、一般路も利用する。周囲は火山性の山容となる。ルートは四阿山を通過して終点の鳥居峠に至る。

ルート上には「日本百名山」が3座、「ぐんま百名山」が17座ある。何よりの「売り」は入・下山口に水上、法師、猿ヶ京、四万、草津、万座、鹿沢といった、人気の温泉地が控えている点だ。逆に弱点となっているのは、入・下山口の横の連絡網が未発達、有人の小屋が3ヶ所にとどまる、エスケープ・ルートが少なく、しかも長い点などが挙げられる。



IMPRESSIONS

「歴史と信仰の山を訪ねて」に思う

江本嘉伸

日本山岳会の年報『山岳』第百十一年(二〇一六年)の巻頭に掲載された、日本山岳会会員である皇太子殿下、徳仁親王の「歴史と信仰の山を訪ねて」は含蓄の深い、この夏、二度目の「山の日」を迎えるにあたり、意味するところ大きな文章である。

2009年8月、初めて富士山に登った際の皇太子の登頂記はこの会報(764号)の巻頭に掲載され、その人柄と山への思いが伝わった。今回、『山岳』に掲載された29

ページに及ぶ文章は、これまで皇太子が登ってきた日本の山々について振り返りつつ山への思いをまとめたもので、やがて日本の天皇となる人が山に対してどのような考えを持っているか、私には非常に興味深く、かつ重要に思われた。

5歳のとき、父天皇と軽井沢の離山^{はなれやま}という山に登って以来、北は利尻山、南は開聞岳まで、これまで170ほどの山に登ってきたとされる皇太子。「そもそも、私は幼少の頃から『道』というものに大

変興味があつた」と、冒頭で興味深い話を披露する。

「その発端は、小学生の時に私の住む赤坂御苑(赤坂御用地)内に鎌倉時代の古道が通っていることを知ったためであるが、ことに、当時外に出たくともままならなかった私の立場では、赤坂御苑の内外を問わず、道を通ることにより、いままでまったく知らなかった世界に旅立つことができたわけである」

そうなのか。皇太子は「道」を見つめて山をたどることになったのだ、と私は新鮮に受け止めた。もともとの歴史好きで、学習院大学で史学科を専攻し、日本中世史と近世史のゼミに入った。それが「10年以上趣味として行ってきた登山という行為と研究という行為が私の中で一緒になった時であった」と書いている。

大学3年で加賀の白山に登る。雨の登山でcome光は拝せなかったが、事前にこの山の歴史を学び、神社の宮司に案内してもらおうなど信

仰の山の歴史に触れることができた。「ただ、この時は、歴史の道への関心というよりは、歴史の山としての白山登山に関心を持ったように思う」と記している。

以後、両神山、伯耆大山と、信仰の山々に相次いで登り、石仏や石碑に人々が山に抱いてきた信仰の心を自分の目でとらえてきた。山登りの根っこにある自由な精神の発露を、皇太子は歴史の道をたどる山旅の中で、歴史が運んでくる時空を超えた自由な風に吹かれながら味わうことができたのだろう。

「信仰の山については平成2(1990)年6月、大峰山登山の体験から一気に深いものとなる。修験者と出会い、鎖場を攀じ、「西の硯」に着いた。「ゆうに100メートルはあるのか、目も眩むような断崖である。岩場から身を乗り出すようにして行われる『のぞき』の行を間近に見たが、とてもやる気にはなれなかった」としている。自身が撮った写真を含め5ページを大峰山登山に割いていることから、この山への皇太子の思い入れが分かる。

そして、日本三大急登の一つとして知られる黒戸尾根からの甲斐

駒ヶ岳登山。大峰山から1ヶ月後というから、皇太子の体力が最も充実しているころだったのだろう。七丈小屋に泊まって山頂を目指すなか、こう書いた。

「八合目の御来迎場の大きな石の鳥居と石碑、岩の上に天を仰がんにばかりに突き刺さった巨大な剣を見るにつけ、これだけ大きなものを運び上げさせた信仰の力を感じずにはいられなかった」

日本の山々に足跡を印す歩みのなかで、何よりも私が心を打たれたのは、皇太子が図らずも昨年初めて実施された国民の祝日「山の日」の思想を早くから自分のものとし、その思いを綴ってきた事実である。本人がどうお考えかは別として、赤坂御苑で鎌倉時代の古道に思いを馳せた少年が、いつの間にか「山の日」への道をたどっていたことに驚かされるのだ。

年報『山岳』は、書店には置かれていない。できるならばこの文章、日本山岳会員にとどまらず、広く山を愛する人たちの間で読まれることを、そして、山と自然を愛する世界各国の人々に伝わるよう、英文訳されることを強く望む。

REPORT

日本山岳会再生委員会を閉じるにあたって

担当理事／会長 小林政志 委員長 森 武昭

当委員会は、現理事会の発足と同時に前理事会からの引き継ぎを受けて、JACの直面している財政問題を総合的に検討するために発足した。具体的には、制度設計・収益事業・会員サービスの3WG（ワーキング・グループ）を設置し、それぞれで詳細検討された案を再生委員会で総合的に審議した。この2年間の審議を通して、再生へ向けた方策と実行への第一歩を踏み出したところである。そこで、当委員会としては初期の目的をおおむね果たしたので、現理事会の任期満了に合わせて解散することにした。2017年6月の総会で決まる次期理事会で、当委員会を示した方向性に沿って受け皿となる組織を新設するなどして、強力に各事業を推進することで、財政再建を成し遂げることを期待したい。解散にあたって、以下に審議概要を報告する。

1 制度設計WG

財政再建の重要な柱として、準会員制度の導入を提案し、昨年の

総会で定款および定款細則の変更の形で承認いただいた。その後の理事会で準会員規程を決定し、昨年10月から実行を案内したところ、この3月までに34名の準会員が入会している。今後、制度が定着していけば、本会構成員の大きな柱になるものと期待している。また、当WGでは、永年会員が今後増加する点についても詳細検討したが、終身会員との関係などで会費徴収は困難であることが判明したので、改めて寄付のお願いを一層強く推し進めることにした。そのほかに、企業などの賛助会員を増やす努力の必要性も確認した。

2 収益事業WG

公益社団法人としての収益事業は限定的であるが、どのような事業展開が可能かを検討した。その一つが広島支部の支援を受けて、「山のお弁当」を高尾山をターゲットに販売することにした。製造業者との話は順調に進んだが、販売経路で大きな壁にぶつかり時間を要した。しかし、この4月に商標

登録を行なうことができ、徐々に販売態勢が整ってきたので、今後の展開に期待が持てる状況になっている。もう一つが、JACの名前の入ったグッズの販売である。これは、100周年と110周年の記念事業として、名入りの時計を販売したところ好評であったことがヒントとなっている。当会が今まで行なってきたグッズ販売とは異なっており、在庫など管理面のリスクをなくした受注販売とし、できれば支部の周年行事などでの大口販売を目指している。

3 会員サービスWG

会員へのサービス向上は以前からの懸案であったが、今回、本格的に取り組んだ。その前提の課題が会員証の問題であった。従来の会員証は紙で、有効期限も明記されていなかったため、会の外でサービスを受けることは困難であった。そこで、プラスチック製で有効期限3年を明記した新しいデザインの新しい会員証を発行することにした。そして、会報2017年1月号で本件実施をお知らせしたところ、1ヶ月で1000件以上の申し込みがあり、関心の高さが示されている。これをベースにWGで

は、まず多くの登山者が入る山域の山小屋にJAC会員へのサービスを依頼したところ、北アルプス22件、八ヶ岳7件、尾瀬5件から提携受諾の回答をいただき、ホームページで公開している。今後さらにほかの山小屋関係、登山用品店、山麓の温泉や宿泊設備、博物館・美術館などにウイングを広げていくべく準備を進め、今年の夏山シーズン前には第2弾として公表する予定にしている。

以上のように、財政問題解決のため、いろいろな施策を検討してきた。冒頭にも記したように、2017年度からは、これらの施策を強力に推進し、確実に成果を得る必要がある。ここ数年、当会は600万円前後の赤字決算を余儀なくされてきたが、現理事会では3年間で赤字体質を改善することを目指して経費削減と収入拡大に努めた結果、2年目にあたる2017年3月期末決算では、110周年記念事業を除くと、赤字は200万円を切るまでに縮小した。以上をもつて、日本山岳会再生委員会の解散にあたっての報告とする。ご尽力いただいた委員の皆様には、誠にありがとうございました。

REPORT

「かながわ山岳誌」への取り組みスタート

神奈川支部 長島泰博

神奈川支部は平成28年3月19日に日本山岳会で33番目の支部として設立され、134名で発足した。

平成28年度は、支部員の親睦を深めることを第一目的として日帰り山行を中心に活動をしてきたが、年度後半になると、支部としての目的を持った活動ができないかという意見が出て、それなら県内の著名なピークに全部登り、記録を残そうということになった。

11月の山行委員会にて実現の可能性について話し合った。不安もあったが、支部会員で取り組みを実施可能という結論に達し、12月の役員会に諮り、正式に決定した。プロジェクト名は「かながわ山岳誌」。

3つの政令市を持つ神奈川は、漢字の「神奈川」が行政の「神奈川県」とイメージされやすく、平仮名の「かながわ」とした。当面の目標は『日本山名辞典』（三省堂）に記載されている282ポイントとし、山行委員会からメンバーを選定し、2万5000分の1地形図30枚を13人で分担し、挙げられた

ポイント（山、峠）の位置の特定と登山コースの検討を行なった。

県内の山を多く登っている支部会員にとっても、名前すら聞いたことのない山もあり、そのような山は当然ガイドブックなどには掲載されておらず、ネット情報と地形図による判断となった。地形図の「大山」や「秦野」はよく歩かれている山が多く、比較的容易に位置の特定ができた。一方「青野原」「御正体山」といった裏丹沢の山はピークの特定も難しい山々が多く、特定に苦労した。意外なところでは「箱根」の山に道がない山が多く、支部でも一、二を争う藪党も悩ませた。

コース取りについては一度に3〜4山の踏破を目指し、ほかのコースと重複しないよう調整を行なった。結果として80のコースが選定され、夏の暑い時期を除き毎月2回実施することで、4年間で踏破することになった。最後の1年は報告書のとりまとめに充て、正味5年で目的を達成しようという

目論見である。

成果については、『日本山岳誌』の神奈川県版を作成し、登山道やピーク位置などの情報を国土地理院に提供する。また、ガイドブックとしての役割のほかに、対象となる山に関連した文化的な情報も記載して、付加価値を高めることにしている。

2月末、プロジェクト提案者の森武昭と丹沢の藪尾根をよく歩いている3名が、進行の作戦会議を持った。その結果、『新日本山岳誌』に掲載されている48山を先行し、難易度別にLレベル、Hレベルに分けて実施することにした。Lレベルはハイキング程度、一般登山道の5時間以下のポピュラーなコースで、一般の参加も認め、神奈川の山を楽しくもろう企画。Hレベルは長時間の山行、沢登り、岩登りの技術を要するコースで、原則としてプロジェクト・メンバーに限定した企画とした。

平成29年4月15日、第1回山行（Lレベル）が湘南平で実施された。支部会員20名と非支部会員4名が参加し、大磯の高来神社から高麗山、浅間山、湘南平と歩いた。実際に歩いてみると、高来神社には



湘南平の岡野金次郎碑の前で第1回山行の記念撮影

神輿を高麗山山頂まで担ぎ上げる祭りが翌週にあることや、浅間山には日本の三角点の基本となった相模野基線の二次増大点である一等三角点があることを知った。また、湘南平には日本山岳会の創設に関わった岡野金次郎のレリーフがあった。

発足して間もない支部ではあるが、活発な活動が求められるなか、5年間という長い期間のプロジェクトを通じて、支部会員のみならず神奈川の山を愛する方々が、郷土の山をより深く知り、仲間を広げていってもらう機会になれば、と期待している。

REPORT

満開の桜の下、第5回小島烏水祭開催

四国支部長 尾野益大

第5回小島烏水祭が4月8日、香川県高松市にある峰山公園で開かれた。主催する本部の山田和人副会長、来賓、全国の会員、主管者四国支部の会員ら約60人が集まった。生憎の小雨だったが、桜は満開。節目にふさわしい実り豊かな講演が碑前祭、夕食会それぞれであり、祭りを盛り上げた。

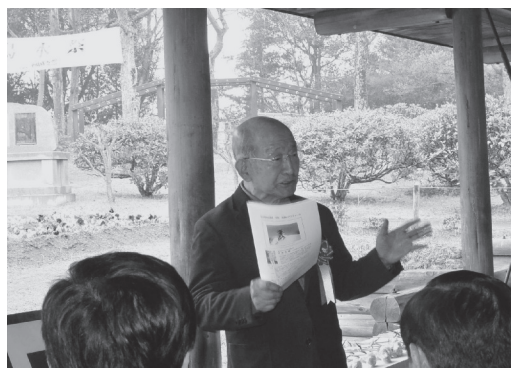
碑前祭の講演の講師はエベレスト日本人初登頂者の一人で、元副会長・平林克敏さん。テーマは「小島栄について」。栄は烏水の16歳下の弟で三高、京都大に進学後、住友銀行に入り、94歳で亡くなるまで兵庫県芦屋市に住んだ。

栄も日本山岳会会員で、番号は450番。三高で山岳部を創設。栄も烏水同様に富士山が好きで、8歳から70歳までに30回登った。性格は明朗闊達で社交的。厚みのある人間だったそうだ。平林さんは「今回、資料を集めて、栄さんが常に前向き、独創的で感性豊かな行動派だったことが分かった。登山の醍醐味は絶頂を極めることを信

条とし、凜とした気力、体力の持ち主だった」と評した。

碑前祭では山田副会長の挨拶に続き、鎌田守恭・香川県議会議員、大西秀人・高松市長、中村順一・高松市議会議員、尾上昇・日本山岳会第23代会長らが改めて烏水の功績を振り返り「今後も烏水祭を盛り上げよう」と呼び掛けた。

重廣恒夫監事ら来賓が紹介されたのち、烏水の孫の小島誠会員が「歌謡詩吟」を披露。吟詠の合間に「青い山脈」の合唱を挟んだ。同歌



碑前祭で講演した平林克敏・元副会長

を作った藤山一郎が、相良泰子会員の叔父に当たる関係から発想を得た新趣向だった。

献花では川口章子・自然保護委員長、金井良碩・関西支部長、宗実二郎・同支部会員、有元利通・

静岡支部副支部長らがカーネーションを顕彰碑の前に供えたのち、全員が「富士の山」を合唱し、四国支部の向井幸雄・小島烏水祭担当役員の辞で会を閉じた。碑前祭に先立つ周辺のハイキングは藤井博会員が先導。昼食は地元の讃岐高松山行会によるボランティアで、名物讃岐うどんの接待を受けた。

夕食会は午後6時から北側中腹のホテル「花樹海」であった。今回



祖父直方について語った山崎和男・広島大名誉教授

の講演の講師は山崎和男・広島大名誉教授。立山の「山崎カール」を名付けた地質学者、日本山岳会会員・山崎直方の孫。和男さんは同じ鎌倉在住の相良会員の紹介だった。

烏水は「日本アルプス雪蝕地形論」で「山崎博士の『氷河果して本邦に存在せざりしか』（明治35年）、『高山の特色』（同37年）は本邦の氷河文献として不滅なる古典……山崎博士が講演したとき、私は最も熱心な聴衆だった……一言一句を味わい、どのぐらい胸を躍らしたであろう」と書き残している。

山崎和男さんは、直方の研究生活や日常の暮らしぶりを分かりやすく話し、貴重な動画を公開した。多くの人が直方本人の素顔と業績を初めて知ったとあって、出席者は興味津々で聞き入り、感嘆の声を上げていた。

この後、重廣監事による関西支部創立80周年記念登山ナングマリⅡ峰登頂報告と長瀬美代子会員による同登山への支援に対する御礼の挨拶があった。四国で活動するソプラノ歌手の公演や、会員シンガールのフォーク・ソングが人気を呼んだ。

NEWS

防災ヘリによる山岳遭難救助、埼玉県が 全国初の有料化に

羽根田 治

去る3月27日、埼玉県議会の2月定例会本会議において、自民党県議団などにより提案されていた「県防災航空隊の緊急運航業務に關する条例」改正案が賛成多数で可決・成立した。これにより、県内の山で遭難した登山者が埼玉県

れない見通し。他県の山岳地での救助活動も対象外となり、県境付近での救助活動については、現場が埼玉県内かどうかをGPSで確認するという。また、生活保護者らは手数料が減免となる減免規定も設けられるようだ。

手数料が徴収されるのは、県に配備されている3機の防災ヘリの出動のみで、1機ある県警ヘリは対象外となる(県内の遭難救助に当たっては、県警ヘリは主に捜索活動を担当し、実際の救助は防災ヘリが行なっているのが現状だと言う)。施行は2018年1月1日からを予定している。

この改正は、「危険を伴う山岳遭難救助活動の費用は受益者負担にするのが公平」という前提の下、登山者の注意を喚起し、無謀な登山を抑止することを大きな目的とする。徴収額は、ヘリのフライト1回約1時間の燃料費に相当する5万円程度が想定されている。運用規定については今後定められていくことになるが、対象となるのは登山者のほか溪流釣りやクライミング目的の入山者で、地元住民や林業従事者には適用さ

ちなみに埼玉県の防災ヘリは、県が委託する民間航空会社のパイロットが操縦し、市町村の消防本部から派遣されている消防航空隊員が乗り込んで救助に当たっている。近年の出動状況は、12年度21件(17件)、13年度34件(26件)、14年度26件(20件)、15年度11件(5件)で、()内は実際に遭難者を

救助した件数である。

埼玉県では2010年7月、奥秩父で救助活動中の防災ヘリが墜落し、パイロットやレスキュー隊員ら5人が死亡するという事故が起きている。これが契機となつて、当時も救助費用の有償化が検討されたが、意見が分かれたことや事故の責任所在の明確な線引きが困難なことなどから見送られた経緯がある。

今回の条例改正に対しては、山岳関係者や秩父観光協会などから「遭難者が救助要請を躊躇しかねない。助かる命が失われる可能性がある」「秩父の山は有料」というマイナス・イメージが先行し、登山客が敬遠してしまう」「現場判断が多過ぎて現場を混乱させる。有料化の前に登山道の整備と登山届の提出を義務化すべき」といった反対意見も出ている。また、手数料が掛からない県警ヘリや隣接する他県のヘリに救助された場合の不公平感を懸念する声もある。

一方、富士山の登山口を抱える山梨県富士吉田市の堀内茂市長は、「(防災ヘリの有料化は)安易な登山に対する一定の抑止効果がある。山梨県も有料化すべきだ」と主張



山岳遭難の救助活動に当たる埼玉県の消防防災ヘリコプター「あらかわ3」(提供=埼玉県消防防災課)

し、埼玉県と同様の条例の制定を県に働き掛ける考えを示した。これを受け、後藤斎知事は「安全登山に關する検討委員会を4月下旬に設置する」と表明、有料化を含めた遭難事故防止に積極的に取り組んでいく姿勢を見せている。

埼玉県が先駆となった公的ヘリの有料化がほかの自治体にどう影響を及ぼしていくのか、今後の成り行きが気になるところだ。登山者にとっても決して他人事ではないこの問題、一人一人が今一度よく考えてみる必要があるだろう。

(フリーランス山岳ライター)

REPORT

故秩父宮雍仁親王がお造りになった空沼小屋の修復成る

空沼小屋の保存を考える会会長 安間 莊

昨2016年2月に始まった、スイス・日本の1世紀にわたるスポーツ文化交流の証である空沼小屋の修復工事が、このたび無事完了したことを皆様にご報告いたします。今回の修復工事は、主として腐朽の激しい基礎束柱および土台組の取り替え工事ですが、曳家工事や運搬仮設工事に多額の費用が掛かり、修復工事としては限定的に終わってしまいました。

会員ほか一般市民の皆様のご協



修復工事中の空沼小屋

力に感謝申し上げます。今後、引き続き有形文化財登録に向けて努力してゆきたいと考えております。7月2日に再開式典を計画

今年7月2日10時30分より現地、万計沼湖畔の空沼小屋で祝賀式典を執り行なう計画で準備を進めております。詳細は北大山岳部・山の会HP <http://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc> をご覧ください。

この式典には在日スイス大使ジャン・フランソワ・パロ閣下ほかの方々のご臨席を賜る予定です。

空沼小屋は、17年7月8日から(2018年以降は5月1日から)10月末までの土曜日・日曜日のみ一般利用が可能です(要予約、北大サークル会館☎011-706-3353)。なお、空沼小屋のほか北大の所有するティネパラダイス・ヒュッテ、ヘルベチア・ヒュッテ、無意根小屋、奥手稲山の家も、土・日曜日の一般利用が可能です。使用料など細部は前記電話で確認・予約をしてください。

空沼小屋の概要

札幌市南郊の空沼岳(標高1251m)の中腹、万計沼湖畔に立つ空沼小屋は1928年1月、北海道視察に訪れた秩父宮雍仁親王が、ドイツ・スイス留学経験のある北大教授・大野精七、同山崎春雄およびスイス人ドイツ語教師アーノルド・グブラー、スイス人建築家マックス・ヒンデルらの構想していた、札幌近郊に展開する「山小屋の鎖」計画を聞き、自らのご意志で山小屋を造ることを決意されました。

設計はマックス・ヒンデルで、スイス風のD形ログ積み2階建てヒュッテ(建物平面積55㎡)で、同年夏までに設計・施工準備が整い、9月着工、同年12月完工という、当時としては超スピードの工事でした。翌1929年1月に、新築なつた山小屋に泊まって山岳スキーを

楽しまれた高松宮宣仁親王は、兄宮の意を受けてこれに「空沼小屋」と命名されました。1930年には一般に開放され、多くの市民に愛された山小屋となりました。最盛期には年間2000人以上の宿泊者があったと言われます。

第2次世界大戦後の1947年、空沼小屋は秩父宮家より北海道大学に寄贈されましたが、その後も高松宮宣仁親王と三笠宮崇仁親王が、空沼小屋に泊まって山スキーを堪能されています。

敗戦による混乱で管理が行き届かず、荒廃してしまつた時期もありましたが、1世紀弱の年月を耐え抜いた頑強な山小屋です。1957年より北大山岳部・北大山の会が管理業務の一端を担うことになり、今日に至っております。

(永年会員・北大山岳部OB)

「山の日」歳事記 五月 豊かな森が育てる山と人

この季節、山々は強い日差しと雨に潤い、日ごと成長する。多様な森の復元を目指して裏高尾で作業を始めたのは17年前だった。百年後を見据え、皆が

力を合わせて急斜面に道を拓き、下草を刈り、除間伐と植林を繰り返してきた。仲間たち、子どもたちと森に通い、後世への遺産を作る日々の楽しさ。(瑛)

N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

ナンダ・コート隊員も 高額負担

関塚貞亨

会報861号6ページの「ナンダ・コート初登頂」の記事を興味深く読んだ。ただ資金調達も一般募金というのは、堀田さんから聞いた話とちよつとニュアンスが違つて感じたものがあるので述べてみる。

堀田さんの話では「皆さんからいただいた10円、20円は大変ありがたかったが、僕ら隊員もひとり20000円を負担した」と聞いて、その高額負担に驚いたのである。

登頂した1936(昭和11)年に二・二六事件はあったが、まだ戦時下ではなく昭和初期のデフレ経済が続いていて、饅頭、大福やコロッケが6個10銭、大学出の若手サラリーマンの月給が40円の時代

で、20000円は年収の3〜4年に当たり、なかでも当時は不動産が安く、東京郊外なら庭付きの一軒家が買える金額であった。

私の山岳会入会は1977年7月で、年齢も52歳で遅かったが、入会して1ヶ月も経たないうちに四番町にルームが移つたので、足しげく図書室に通い、古い『山岳』や会報を読みふけていた。そんなある日、ルームに堀田さんが現われたのである。

昭和初期の大学山岳部には数多くの猛者が綺羅星のごとく現われたが、その中でもナンダ・コート登頂以前から堀田さんは抜きん出ていて、彼ら猛者たちから畏敬されていた存在であることは知っていた。あいにく会室には会員は私ひとりであった。堀田さんは「沼倉君から水曜日に集まりがあると聞いて来たが、だれもいないな」と言った。

寄付金及び助成金などの受入報告

平成29年3月報告まで

寄付者など	金額 (単位千円)	寄付の目的、その他
立花種則 会員 (新永年会員)	50	法人運営費用として
尾上 昇 会員	1,500	東海支部「インド・ヒマラヤ」出版費用に充てるため
佐野忠則 会員	500	東海支部「インド・ヒマラヤ」出版費用に充てるため
国土緑化推進機構	640	ラオス友好の森造成活動 28年度計画の残金
京王電鉄株式会社	1,000	高尾の森づくりの会 運営助成金
佐野忠則 会員	850	法人運営費用として
(岩瀬秀郎 会員) 図書交換会益金	14	法人運営費用として
関西支部会員など 132名から (別途報告)	3,900	関西支部80周年記念募金 平成28年9月以降の寄付

その日は第2水曜日で、沼倉さんが代表を務める三水会の集まりは1週間後である旨を答えると、最近の登山事情を聴きたいと、東亜ビル地下の喫茶店に誘われた。私では力不足と思つたが、曲がりなりにもフリークライミングまでを答えてからナンダ・コートのことを聞いたのである。その中で話で、さらに「なんでナンダ・コートに登ろうと思ったのですか」という問いに「ロングスタッフの本だよ」が答えだった。

その後、堀田さんは三水会でナンダ・コート登山の話をして、四

十数年前に使用し大切に保管してきたガルワール・ヒマラヤの地図を回覧し、また、1980年に名誉会員に推薦されたとき、その年の晩餐会の会場だった京王プラザホテルに、堀田さんが持つていたナンダ・コート登山の大きな写真パネル十数枚が展示された。

昭和11年に私は小学6年生で11歳、1934(昭和9)年のナンガ・パルバットのドイツ隊の悲劇と立大隊の快拳の両方とも新聞紙上で読んだ記憶があった。6年生の修学旅行が高尾山登山で、初めての山との出会いの年であった。



活動報告




日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。




山行委員会

乗鞍岳雪山登山に 参加して

1月中旬の八ヶ岳が強風のため登頂を断念して落ち込んでいたところ、本誌860号で「天候も和らぐ早春の乗鞍岳に……肩の小屋までスノートレックを楽しみ……肩の小屋からはアイゼン、ピッケルの世界……剣ヶ峰を目指す」との山行委員会の計画を知り、早々に申し込んだ。スノーシューを履くのは久しぶりなので、ひとり富士山御殿場登山口から二ツ塚へ幕岩まで足慣らしに行き、来たるべき本番に備えた。

3月14日(火)、午後4時ごろに集合場所である休暇村乗鞍高原に着く。この日は休暇村に宿泊。部屋からは明日登る予定の乗鞍の峰々が望めた。翌日の天候が気になり午後9時ごろに外に出て空を見上

げたところ、満点の星空であった。星が輝き過ぎていることが気になったが、明日は良い天気になるとを祈り布団に潜る。

翌日は6時起床。昨日見えていた乗鞍の峰々は雲の中で全く見えない。やはり昨夜の星の輝きは悪天候の前兆であったのだろうか。7時朝食、出発予定時刻の8時には全員出発準備を完了。この時点では風はなく曇天、気温マイナス8度C。

スキー組の古川さん、小笠原さん、スノーシュー組9名の2班に分かれて登山を開始する。先頭菊池CL、後押さえ清登SLの下、ほぼ予定時刻に出発する。8時30分に休暇村第1リフトに乗車。第2リフト、カモシカリフトと乗り継ぎ、9時10分スキー場のトップに到着。西風が強くなる。ここからいよいよ雪山である。菊池CLの指示によりスノーシューを装着す

る。これより先はスキーヤー、登山者は皆無、我々だけである。それにしてもスキー組の2名は速い。シールを効かせてグイグイ登っていく。私たちも負けじと後を追っていくが、ときどき姿が見えなくなる。

小雪の状態だが風は強くなり、ときおり私の故郷で言う「吹きランプ」の状態になる。樹林が両側から覆いかぶさり、スキーツアーコースが狭くなる。緩やかな斜面になった付近から降る雪が多くなり、さらに風も強まってきた。10時50分、6番の表示板から約50m過ぎた所で、菊池CLが「風雪激しく、視界も悪く、位ヶ原から先は平原で風雪を避ける場所もなく、天候回復も望めない。森林限界の位ヶ原入口まで行き引き返す」と判断を下す。

15分ほど登った11時5分、「右位ヶ原山荘、左位ヶ原」の道標に到着する。ここが森林限界であろう。左右はいきなり低木帯に変わり、正面は広々とした雪面で、その先は吹雪のため何も見えない。残念ながら菊池CLが「撤退」の最終判断を下す。

ここまで登った証に道標を背に

全員で記念写真を撮り、下山を開始する。スキー組はシールを外して快適に滑っていく。スノーシュー組も負けじとスノーシューを軽快に操り、快適に雪面を下る。13時23分、休暇村の駐車場に着いて解散する。

今回の山行は、天候が悪化することは分かっていたので「山頂を踏めれば儲けもの」と考えて参加した。儲けることはできなかったが、早春の乗鞍岳を思う存分スノーシューで歩くことができ、雪山を満喫した。

(安瀬善一)

図書受入報告(2017年4月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
笹倉孝昭 著	高みへ 大人の山岳部 :登山とクライミングの知識と実践	190p/26cm	東京新聞	2015	出版社寄贈
ライチョウ会議(編)	第17回ライチョウ会議長野大会報告書 :2016年10月15~16日	183p/30cm	ライチョウサミット実行委員会	2017	発行者寄贈
竹地里加子(編)	日本300名山 山あるきガイド 上巻 (大人の遠足BOOK)	320p/21cm	JTBパブリッシング	2017	出版社寄贈
竹地里加子(編)	日本300名山 山あるきガイド 下巻 (大人の遠足BOOK)	320p/21cm	JTBパブリッシング	2017	出版社寄贈
関根茂子(編著)	関東近県 花のハイキング12ヶ月(新ハイキング選書 No.38)	274p/21cm	新ハイキング社	2017	出版社寄贈
国立公園研究会(編)	国立公園論 :国立公園の80年を問う	264p/21cm	南方新社	2017	発行者寄贈
志田忠儀	ラスト・マタギ :志田忠儀・98歳の生活と意見	205p/20cm	KADOKAWA	2015	出版社寄贈
志田忠儀	山人として生きる (角川文庫 No.し-60-1)	213p/15cm	KADOKAWA	2017	出版社寄贈
江本嘉伸	西蔵漂泊 新編 :チベットに魅せられた10人の日本人(ヤマケイ文庫)	525p/15cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
「山の日」実行委員会(編)	山鐘 :第1回「山の日」記念全国大会 登攀の記録	150p/30cm	「山の日」全国大会実行委員会	2017	発行者寄贈
安藤忠夫	絵本 わが山の日々 :山道も下山に入って	206p/19cm	安藤忠夫(私家版)	2017	著者寄贈
樋口明雄	レスキュードッグ・ストーリーズ :南アルプス山岳救助隊K-9	318p/20cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
岩橋崇至	北アルプス 花 (写真集)	80p/19cm	日本写真企画	2017	著者寄贈
南谷真鈴	自分を超え続ける :熱意と行動力があれば、叶わない夢はない	215p/19cm	ダイヤモンド社	2017	出版社寄贈
Nakashima, Michiro (ed.)	High Altitude Medical Studies of Academic Alpine Club of Kyoto (AACK)	298p/26cm	京都大学山岳会	1998	山田和人氏寄贈
Mason, Kenneth (ed.)	The Himalayan Journal (Special Volume Nos.I-XIV)	136p/22cm	The Himalayan Club	2017	発行者寄贈



図書紹介

山本正嘉著

登山の運動生理学とトレーニング学



2016年12月
東京新聞 A5判 716頁
2700円＋税

本書は運動生理学者で登山家でもある山本正嘉氏が16年前に上梓した『登山の運動生理学百科』に、その後得たデータを増補した改定版であり、いわば氏の仕事の集大成である。前著は約300ページだったが、本書は700ページを超え、氏の研鑽ぶりがうかがえる。登山を科学として究めるという姿勢の貪欲さは、留まるところを知らないようだ。

内容は、「登山と健康」、「登山界の現状と課題」、「疲労と対策」、「体力トレーニング」、「高所登山」、

「登山における可能性と限界」の6章からなる。「疲労と対策」、「体力トレーニング」は前著よりも3倍前後に増頁されており、本書の中心的なテーマである。

まず、氏は山岳遭難を概観し、「下り」の脚力不足による転倒が遭難の大きな原因であること、「上り」での心肺能力不足による心疾患も増えていること、安全登山のために山と自分の体力をマッチさせる必要性などについて指摘している。

「疲労と対策」では、上りでの疲労は乳酸が蓄積する強さ(閾値)を超える速度で登った場合に起こり、下りでの疲労は脚筋の筋細胞が壊されて起こると述べている。エネルギー不足と水不足にならないことも重要とのこと。

「トレーニング」では、登山と下界での運動を組み合わせることが必

要であるという。要点として、適度な負荷、登山と類似した運動、個別メニュー、トレーニングを続けることを挙げている。大腿四頭筋は加齢に伴って衰えやすいが、スクワット、上体起こし、脚上げで強化できるという。持久力には登山が最適であり、酸素摂取量を上げるためには走る、泳ぐなどの強度が高い短時間の運動が必要であるという。柔軟性、バランス、敏捷性も重要な能力で、ストレッチで柔軟性が改善され、疲労の防止や回復に効果的であるとのこと。氏自身の膝痛の克服記は参考になる。「高所」も、氏が情熱を傾注しているテーマである。海外高所登山やトレッキングで準備しておくことと、現地での対処について触れている。

最終章「可能性と限界」では、最近盛んなウルトラマラソン、トレイルランニング、極限的な登山、クライミングなど、耐久性的・耐乏的な運動を扱っている。

氏は最後に、自分の身体の仕組みを知る楽しさ、意図したとおりに身体を変えられることができたときの達成感について触れ、本書が登山という枠を超えて、そのための

案内書として役立って欲しいと述べている。興味が尽きない内容で知的な刺激を受ける。もちろん、登山をする上で示唆に富み、役立つことだろう。なお、内容的に多岐にわたるので、興味のある部分から読んでも良いし、コラムも読みごたえがある。

(野口いづみ)

安藤忠夫著

絵本 わが山の日々 ―山道も下山に入って―



2017年4月
私家版 B5横判
205頁 非売品

この本の内容は、そのタイトルによく表わされている。「絵本」で絵がたくさん入っていることが分かる。「わが山の日々」で登山が好きで長い間登山に明け暮れた日々を書いたことが分かる。「山道も下山に入って」で著者がそろそろ高齢になりつつあって、その思い出が描かれていることが分かる。タイトルだけで分からないのは、扱っている山々が、すべて日本の

本州中央山岳地帯の山々だけであることだ。タイトルだけでは、登山に関する自分史のように感じるが、少し違う。自分の好きな山々だけなのだ。著者の目はそこだけに注がれていて、その基本に安曇野があり、ついには「隠居小屋」を安曇野に建ててしまう。そして、そこに愛する孫たちを登場させる。

明らかに、この本はひとつのテーマでまとめられている。世間に多く見られる登山に関する自分史ものとは違う世界を描いている。思い出話だけを並べたものではない。確かに各ページにすべてスケッチをほとんどカラーのイラストとして挿入し、表紙にも、中扉にもイラストを入れ、口絵も全ページ大でスケッチを載せ、驚いたことに、最終ページにまで全ページ大のスケッチを載せている。挿絵は600点にも及ぶ。しかも装丁、造本にも、贅沢と言つていいくらいに相当の気を遣っている。これから挿絵と装丁、造本だけでも、著者の努力した跡が見られ、労作と言うべきだが、前述したように、ひとつのテーマとして構想し、それを仕上げたことから労作と言うべきであろう。

「安曇野、隠居小屋建築顛末」にも書かれているように、池田町の高台に住んで、白馬岳、五竜岳、鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳、蓮華岳、針ノ木岳と続く山並みを見て、さらに、そこからは見えない剣、薬師、槍、穂高、立山その他の中央山岳地帯の山々における登山を想い、愛する孫たちを前にして楽しく語る、というテーマをまとめたのが本書である。そして、それは見事に成功したといえよう。

(水野 勉)

新編 西藏漂泊

江本嘉伸著



2017年3月刊
山と溪谷社 525円
文庫判 1100円＋税

8世紀、吐蕃と呼ばれたチベットはシルクロードを縦横に駆け巡った。時は大きく下つて19世紀末から太平洋戦争終結までの半世紀、清・英・露が露骨に干渉するなか、文明の光の当たらない西藏を旅した10人の青年を描いた前著『西藏漂泊』が、構想新たに甦った。

まずチベットを目指したのは、インドから河口慧海、四川省から能海寛、寺本婉雅、成田安輝である。第1章「帰つてこなかった学僧」と第2章「チベット旅行記」の衝撃でこの4人が交差する。ここでは能海に注目したい。彼の動機は仏教の再興と経典の入手で、チベットの東に入った最初の日本人だが、悲運にも雲南省の奥地で消息を絶った。仏教徒として最も求道的であつた彼はもつと知られてよい。河口は旅行記で有名だが、仏典に拘る激しい人だ。寺本も学僧で、最初に「大藏經」を入手する強運に恵まれた。成田は野心家で、彼の「進蔵日誌」は「山岳」65・66号に掲載されている。

ひとり並外れて特異な人物がいる。第3章で「世界一周無銭旅行家」と名乗る矢島保次郎だ。仏教も政治も興味はなく「只々余はアドベンチャーヲ試ミン」と言う。チベットには6年余滞在、チベット婦人と結婚し、チベットの軍事教官でもあつた。河口は18年掛かりの大業を成し遂げようと再びラサに入る。このときラサには矢島、河口、青木文教、多田等観の4人がいた。青木は大谷光瑞から派遣さ

れた留学生で、チベット文字が巧みで美しい文字を書き、写真に秀でていた。

ここで事件が起きる、第4章の「大正の玉手箱事件」である。「大蔵経」入手を巡って、光瑞宛だと主張する青木と、自らが入手したとする河口の2人が鋭く対立する。使命感が功名心か、事態は決着を見ないまま、今その「大蔵経」は東洋文庫にある。

第5章「ダライラマ13世の寵愛」で語られる多田は、13世の信頼が篤く「チベット人以上にチベット人」と言われた。22歳の秋、ブータンを縦断し裸足でチベットに入ると、10年間セラ寺で学んだ。

第6章「農業チベットの目撃者」の野元甚蔵は、特務機関の情報員でツァン地方の農村に1年半住んで、チベットでの穀物農業の重要性に気づいた。

第7章「興亜義塾の青春」で語られるのは2人。卓越した語学能力を持つ木村肥佐生は、興亜義塾からモンゴル僧として北のツァイダム盆地を経てラサに入る。ハイシリッヒ・ハラーに拳銃を売った人だ。1945年10月、インド・カリンボンで敗戦を知る。1期下の

西川一三は、内モンゴルからラサに入り、木村を訪ねて敗戦を知るも、再びチベットに戻ってデブン寺で最底辺の生活を経験する。7回のヒマラヤ越えにも耐えた、ずば抜けて強靱な身体と精神の持ち主だ。2人のチベット行は国を背負ったものだったが、敗戦はそれをすべて無にした。

チベットの不思議な力に魅せられ、その魅力を語り合った、2001年の「日本人チベット行百年記念フォーラム」の熱気、そこでの西川氏の「チベット人は嫌いだ」という強烈な発言や、野元氏が本会ルームで来し方を語ったことも忘れがたい。2人にはどこか突き抜けた明澄な強靱さがあり、それがあの苛酷を生き延びさせたのだらう。

新編は錯綜していた時代が流れに沿って整理された。そして、何より本書に響くものは、江本氏の未知へ挑む者、知の探検者への共鳴である。貞兼綾子氏の解説は、チベットにこだわり続けた著者に優しい。巻末年表に、グレート・ゲーム、大谷探検隊を加えてみるのも一興だろう。地図を座右に、心して読まれたい。

(絹川祥夫)

会務報告

平成29年度第1回(4月度)理事会

議事録

日時 平成29年4月12日(水)19時00分～21時00分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤

各常務理事、中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・

谷内各理事、平井・重廣監事

【欠席者】勝山・星理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・次期(平成29～30年度)役員人事(理事・監事)について

以下の会員を次期理事・監事候補者とする事について審議した。

理事《再任》大久保春美(7249)、小林政志(7915)、神長幹雄(9722)、中山茂樹(11319)、

星征雅(14837)、谷内剛(14951)、《新任》重廣恒夫(793

1)、安井康夫(8494)、清登緑郎(8612)、野沢誠司(9863)、永田弘太郎(12319)、斎藤繁(14143)、近藤雅幸(14972)、波多野あをい(15208)、古川研吾(15888) 監事

《再任》平井拓雄(7292)、《新任》石川一樹(11022)

(賛成13名、反対なしで承認)

2・支部長の交代(宮城・広島について

申請のあった以下の支部長交代について審議した宮城支部 新支部長・富塚和衛(14612)広島支部 新支部長・八幡浩(7091)(賛成13名、反対なしで承認)

3・高額寄付の受入承認について 東海支部からの高額寄付事前申請及び高尾の森づくりの会からの高額寄付受付報告について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

4・平成29年度特別事業補助金について

申請のあった以下の支部長交代について審議した宮城支部 新支部長・富塚和衛(14612)広島支部 新支部長・八幡浩(7091)(賛成13名、反対なしで承認)

東海支部、四国支部、越後支部、関西支部、栃木支部、山形支部に
対する平成29年度特別事業補助金
について審議した。(賛成13名、反
対なしで承認)

5・再生委員会の廃止について

日本山岳会再生委員会を6月の
現理事会任期満了をもって解散し、
来期以降に事業推進組織を新設す
ることについて審議した。(賛成
13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・平成28年度事業報告書(案)に
ついて(佐藤)
平成28年度事業報告書(案)につ
いて協議した。

2・広島支部の「富士山における
滑落死亡事故」等について(佐藤)
平成28年11月20日(日)に発生した広
島支部「富士山における滑落死亡
事故」についてその後の状況の確
認と当会の対応について協議した。

【報告事項】

1・3月受付分の入会希望者43名
(うち復活3名)および準会員入会
希望者29名について入会承認を行
なったとの報告があった。(小林)
2・7件の寄付金及び1件の募金

受入れ、1件の募金開始について
報告があった。(吉川)

3・熊本支部設立60周年に伴う寄
付金の募集開始の申請について報
告があった。(吉川)

4・「公益社団法人日本山岳協会」
の名称が平成29年4月1日より
「公益社団法人日本山岳・スポー
ツクライミング協会」となったと
の報告があった。(佐藤)

5・第2回全国「山の日」フォーラ
ムからの後援名義の使用申請につ
いて、これを承認したとの報告が
あった。(佐藤)

6・第5回小島島水祭・全国支部
懇談会(茨城支部)への助成金につ
いて報告があった。(吉川)

7・4月18日(火)に開催される「平成
29年度第1回評議員懇談会」の開
催について報告があった。(佐藤)

8・2月14日(火)3月29日の間に行
なわれた各委員会に対するヒアリ
ングの結果について報告があった。
(大久保)

9・YOUTH CLUBの組織
改編について報告があった。(山田)

10・YOUTH CLUBの組織
改編に伴う「沢登り同好会」の解散
について報告があった。(佐藤)

11・同好会「里山歴史研究会」の設

立について報告があった。(佐藤)
12・第11回日中韓3国学生交流登
山の開催概要について報告があっ
た。(佐藤)

13・関西支部「東ネパール登山隊
2016」の仮報告書について報
告があった。(佐藤)

14・「上高地山岳研究所ミニ水力
発電」の長野県1村1自然エネル
ギープロジェクトへの登録につ
いて報告があった。(大槻)

15・7月9日(日)10日(月)に開催さ
れる「2017年度自然保護全国
集会」について報告があった。(山
田)

16・外務省の渡航中止勧告地域へ
の山行委員会主催海外登山の対応
状況について報告があった。(大
久保・佐藤)

17・日本極地研究振興会からの新
規会員紹介と寄付の依頼につ
いて報告があった。(佐藤)

18・6月23日(金)25日(日)に開催さ
れる平成29年度安全登山普及指導
者中央研修会について報告があっ
た。(佐藤)

19・「安全登山ハンドブック20
17」の配布について報告があっ
た。(佐藤)

20・「山」4月号の発行について報

告があった。(神長)

【連絡事項】

1・群馬県知事からの谷川岳危険
地区の登山禁止について

2・九州地区5支部懇談会 5月
20日(土)21日(日) 海峡ビューしも
のせき(下関市)

3・茨城支部10周年記念式典 6
月17日(土) ホテルマロウドつくば
(土浦市)

4・熊本支部設立60周年記念式典
11月18日(土) アークホテル熊本
(熊本市)

【今後の予定】

1・平成29年度第1回評議員懇談
会 4月18日(火)17時(集合室
2・平成29年度監事監査 5月9
日(火)

3・5月度常務理事会 5月10日
(水)

4・5月度理事会 5月17日(水)
5・平成29年度通常総会 6月24
日(土)14時(主婦会館 プラザエ
フ

会員異動

物故

高室陽二郎(2890) 17・4・17

松葉 明 (3471) 17・4・12
 安藤武敏 (4860) 17・4・5
 杉山正洋 (5301) 17・4・1
 浪花 徹 (7836) 17・3・7
 重村 清 (9372) 17・4・18
 藤田友生 (10725) 17・3・27

退会

鈴木常夫 (6914) 東海
 佐藤泰彦 (8776) 岩手
 岡本真理子 (9667)
 松澤君子 (9806)

「山の日」リーフレット② 「山の一番、知ってますか？」 を発行

祝日施行から2年目の今年、「山の日」運動推進のツールとして、当会オリジナルのリーフレットを作りました。昨年の《「山の日」を知ろう》に次ぐもので、サブタイトルは「地元の山を再発見しよう」。内容は全国の山についての知識を競うお楽しみクイズ《山の一番、知ってますか?》です。会報に同封して各位に2部お届けしますので、どうぞ有効活用してください。

「山の日」事業委員会

ルーム目誌 4月

野田多恵子 (10132) 北九州
 野口ヒサ子 (11307) 越後
 川端 守 (13411) 東海
 水永一芳 (13662) 宮崎
 都立青山高等学校山岳部OB会
 (14040) 首都圏
 松永幸吉 (14212) 東京多摩
 沼田満喜子 (14871) 東海

1日 緑爽会
 3日 総務委員会
 4日 常務理事会 スケッチクラブ
 5日 自然保護委員会 図書委員会
 山行委員会 公益法人運営委員会
 6日 山行委員会 YOUTH CLUB
 10日 スキークラブ
 11日 自然保護委員会 山岳研究所運営委員会
 12日 理事会 休山会 山想倶楽部
 13日 自然保護委員会 フォトクラブ
 山岳地理クラブ 九五会
 14日 YOUTH CLUB
 15日 山の自然学研究会
 17日 総務委員会 資料映像委員会
 スケッチクラブ
 18日 「山の日」事業委員会 スキ

19日 1クラブ
 YOUTH CLUB 三水会 つくも会
 20日 科学委員会 YOUTH CLUB みちのり山の会
 21日 総務委員会
 24日 支部事業委員会 青年部
 フォトクラブ
 25日 デジタルメディア委員会
 26日 緑爽会
 自然保護委員会 麗山会
 27日 学生会 公益法人運営委員会
 スケッチクラブ 01
 28日 山遊会
 総務委員会
 4月来室者 551名

I

N

F

O

R

M

A

T

I

O

N

インフォメーション

◆越百山―南駒ヶ岳―空木岳縦走案内

山行委員会

中央アルプス南部に連なる越百山、南駒ヶ岳から秀峰空木岳への縦走のご案内。

日程 8月18日(金)〜20日(日)
 集合 18日(金)JR中央本線上松駅前7時30分

行程 18日Ⅱ上松駅Ⅱ伊奈川ダム
 上駐車場―越百小屋(泊)
 19日Ⅱ越百小屋―越百山
 ―南越百山―南駒ヶ岳―

赤柳岳―空木岳―木曾殿山荘(泊) 20日Ⅱ木曾殿山荘―北沢吊橋―伊奈川ダム上駐車場―日帰り温泉入浴―上松駅(解散)
 18日Ⅱ約5時間45分 19日Ⅱ約8時間 20日Ⅱ約5時間15分(健脚向き)
 2万5000円(山小屋代・タクシー代・保険料等)
 定員 9名
 申込み 8月1日(火)まで
 三枝光吉

平成29年度(前期)「海外登山助成金登山計画」募集 海外登山助成金審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山助成金」による助成を行なっています。

第37回となる今回も、極限探究、新しい課題への挑戦、発想の新しさ、夢多き計画など、創造的でユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。学生や若年クライマーも奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成29年8月1日～平成30年1月31日に海外の山へ出発する登山隊。
- 申込み方法 所定の様式(事務局にご請求いただいても結構です)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込み締切 平成29年6月15日(当日消印有効)。
- 審査と助成期間 平成29年6月中旬に審査し、理事会で決定し助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出を必ずお願いします。また、日本山岳会の会報「山」にも掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局 TEL03-3261-4433

TEL 080-6627-5687
@sanko@jac.or.jp
*傷害保険加入のため、性別・生年月日をお知らせください。

◆同好会「里山歴史研究会」発足

4月の理事会で、新しい同好会として、「里山歴史研究会」(略称「サトケン」)が承認されました。里山は、その土地の人々の生活と深く密着し、山岳信仰や地域の食文化などを伝えてくれます。全国各地の「里山」の魅力に恋をした有志で、

この7年間に約100回、延べ1200人ほどの参加で歩いてきました。これまで関東ふれあいの道、信越トレイル、鎌倉古道などを訪ねましたが、同好会発足を機に、行動範囲を広げたいと思います。年々シニア世代を応援するかのよう、登山用品は軽く、便利になっています。あふれるばかりの好奇心を胸に、先人の歴史を学び、見知らぬ里山を訪れてみませんか。代表・植木信久 副代表・柴山武事務局・植木淑美、皆川朝一

《当面の活動予定》

- *7月 芭蕉の歩いた月山など(出羽三山)
- *8月 朝靄にけむる湿原、会津駒ヶ岳から中門岳
- *10月 錦秋の涸沢カール(上高地山岳研究所宿泊)
- *11月 近江・湖北の秘峰
- *未定 島根・隠岐の島などを検討しています。

パミール・ハイウェイとワハーン渓谷

2月号の本欄でお知らせしました「パミール・ハイウェイとワハーン渓谷」の募集告知は、山行委員会が企画し、旅行企画実施主体は(株)西遊旅行(観光庁長官登録旅行業第1種607号)でした。まぎらわしい記述だったために、再掲載いたします。

期間 7月4日～15日(12日間)
費用 52万8000円
定員 12名
問合せ 三井吉由江

TEL 090-7806-7601
03-3451-5388
@sanko@jac.or.jp

FAX 042-734-1498(植木)

◆編集後記◆

●今年のGWはメイ・ストームもなく、好天に恵まれたようですが、それでも剣や穂高など各地で遭難が相次ぎました。新聞報道などによる感想ですが、近年は悪コンディションによる遭難より、「登りたい山」に対して登山者側の実力が伴わない、山と人のミスマッチによる遭難が多いように感じます。●中部地方の主要山岳を中心に、山のグレーディング化が進んでいますが、それらは主に無雪期の山が対象で、冬山や残雪期の山となると、そのグレードは一気に上がります。山という厳しい自然環境において、「絶対安全」はありません。あふれる情報から自己過信し、自然を畏れ、山を恐れる謙虚な精神が希薄になっているのではないかと、と惧れています。(節田重節)

日本山岳会会報 山 864号

2017年(平成29年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社